
太陽

わたた

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

大陽

【Nコード】

N1738Q

【作者名】

わった

【あらすじ】

ドロドロした話を書き続けている作家の俺―地獄谷涼。俺にとって、プライベートなんて無意味だと思っていた。そんな俺を変えられる人なんて、いないと思っていた。……彼女に出遭うまでは。

第1話（前書き）

初の投稿作品です。

はつきり言って、つまんないです。

支離滅裂です。

それでも読めるといふ強者の方は、読んでいただければ嬉しいです。

第1話

「男は言った。

「僕は君のことを本当に愛している。君のその美しい瞳で他の物を見て欲しくない。君のその美しい手で他の物に触れて欲しくない。――だから」

男はおもむろにナイフを出し、女の喉元に突き立てた。紅い血が溢れる中、男は狂気の笑みを浮かべていた。そしてそこから動かず、いつまでもその場に佇んでいた。自分だけの物になった女の美しさを、確認するかのよう――」

「……こんなもんかな」

俺はそこでキーボードを打つ手を止め、ゴミだらけの汚い部屋へと視線を移した。汚い部屋だが、別に掃除する気にはならない。作家――しかもこんな作品を書いている俺――にとって、自らのプライベートルームなことはほど無意味な物はない、と思う。そんなものがあつたら、こんな話は書けないだろう（多分）。

俺がそんなことを思っていると、扉をノックする者がいた。

「いやー、ごめんごめん、野田君。渋滞に巻き込まれちゃって、ちよつと遅れちゃったよ」

小太りの、いかにも無能感溢れる中年が、ずかずかと上がり込んできた。しかしこんな顔と体型をして、仕事は意外にもやるのだから侮れない。そもそも作家の俺を本名で呼ぶ人なんて、両親以外にはこの人しかいないだろう。

そんなわけで、かやまみちとし 加山道敏。

俺の担当の登場だった。

「相変わらず汚い部屋だ。掃除とか、少しはしたらどうだい？」

「小説書いてたら、そんな暇ありませんよ。つか、そんなことし

てたら、小説書けなくなります」

俺はやや苛立ちにも似たトーンで言葉を返した。作家に一般常識が通用しないこともあるって、いい加減分かってくれや。これさえ無けりゃ、もう文句はないんだが。

「あー、そうだったね、ごめんごめん」

俺の声のトーンで俺の言いたいことを察したのだろう、加山は少し申し訳なさそうな表情を浮かべた。分かればいいんだ、分かれば。

「……原稿、受け取ってもらえます？」

「ああ、じゃ、受け取るよ」

加山はにやりと笑い、原稿を受け取る。そして言った。加山にだけ許される台詞を。

「こうぐち地獄谷君」

この儀式(?)は加山が必ず行うものらしい。原稿を受け取るとき、作家をペンネームで呼ぶことで、次回作へのモチベーションを高めるとか、高めないとか。

まあそんなものはただの建前で、実際はゲン担ぎとか、そんなとこだろう。

まあ、それはそれとして。

「……次回作も、頑張りますよ」

作家、地獄谷涼。

名前を呼ばれた俺は、なんだかよく分からない相槌を打って、再びパソコンへと向かった。

第2話（前書き）

第2話です。

いよいよ意味不明です。

よろしく願います。

第2話

加山が帰った後も、俺はパソコンに向かい続けていた。ゴミだらけの部屋には目もくれず、ひたすら編集作業を続ける。

作家がプライベートなど気にしてどうする。

表現者になった時点で、そんなもの捨てやがれ馬鹿野郎。

そんな職人気質な言い訳を頭に浮かべつつ、俺はキーボードを打ち続けた。

しかし……

「……うん……」

果たしてこれはいいのだろうか？ 今までの作品に比べると、ドロドロ度が足りない気がするが。

探偵が犯人の気持ちを理解するため人を殺す話とか。

総理大臣が「全ての人を幸せにしたい。そのためには罪人の気持ちも理解せねば」とかなんとか言って殺人を犯す話とか。

それらの過去作品に比べると、ドロドロ度が足りない。

極度の心配性の男が、溺愛している女を他の男にとられたくないために殺人を犯すドロドロっちゃあドロドロだけだな……安っぽい昼ドラの、発展系のような気がするならない。

それに何より、俺は恋をしたことがない。

他の誰かにとられたくないくらい誰かを好きになったことが、無い。

そんな奴が（曲がりなりに）恋愛小説書いてもなあ……

この作品を発展させるためには、俺自身のプライベートが必要になっってしまうだろう。小説の為になら、しょうがないかな……

あ、でもそしたら、俺は愛した女を殺すところまでしなければいけないのか？

つかそもそも、恋ってどうすればいいんだろ？

「……分かんね」

小説以外のことを考えるのは、非常に苦手だ。発想を転換させて考えよう。

え〜とえ〜と……………

「……………あ」

そうだ。

無理にプライベートで恋愛しようとするから困るのだ。

こういうときは、過去の名作から学び、恋愛をした気分になって、そして俺の作品を発展させようじゃないか。
そんなわけで俺は。

自宅のボロアパートを出て、書店へと向かった。

第3話（前書き）

なかなか更新できず申し訳ありません、第3話参ります。

第3話

自宅のボロアパートから歩いて3分と手軽な位置にある書店「ヤナギヤ」。店長の嗜好に大きく左右されたラインナップが、店内狭しと並んでいる。この自動ドアをくぐるたび、俺は俺は肩身の狭い思いをしていた。なぜなら――

「あ、地獄谷先生。恋愛小説の素晴らしさ、分かってくれた？とりあえず一般的なBLやGLものから始めようか。新しいの、入ったからさ」

・こんな店長だからである。爽やかに笑みを浮かべているこの青年こそが、「ヤナギヤ」の店長――

柳谷祐一だった。恋愛小説を読むことにおいて、彼の右に出るものはいない。だから自然と、「ヤナギヤ」のラインナップは恋愛もの（それもBLやGLが大半を占めている）が多いのである。だから俺は今まで、肩身の狭い思いをしてきたわけだが、それも今日までだ。

「ね、BLBL。それとも最初はGLがいい？」

「黙れこの精神異常者が。俺はお前みたいに同性間同士の恋愛本なんて読まない。俺が読むのは普通の恋愛本だ」

「おやおや小説家らしくもない発言だ、地獄谷先生。君は今BL本及びGL本読者を精神異常者と言ったのと同じ発言をしたのだよ？人権侵害、名誉毀損。お先真つ暗だね」

「黙れと言っている」

俺は柳谷を思い切り突き飛ばした。柳谷はそのままの勢いでレジへと向かう。奴はこのやり取りを楽しんでる傾向があるな、どうも「えーと恋愛、恋愛……」

俺はBL、GLでない恋愛小説を探そうとした。しかしそこは店長の変態的嗜好が押し出されている「ヤナギヤ」、なかなかそれらの本は見つからない。スタンダードなBLやGLを探すだけでも――

苦労だ。

「雌豚と私」

「150kgの男」

「加齢臭に恋する僕」

つて、ハードにもほどがある！需要あんのかこれ……
そうしてタイトルを見ていくうちに、俺は1冊の本を見つけた。
「暗闇の探偵」。

俺ー地獄谷涼のデビュー作。どうやら俺は知らない間に、恋愛以外のコーナーに来ていたらしい。

てかこの店、俺の置いてたのか……柄にもなく嬉しく思っ
ちやったり。俺はその本を手に取りー

「地獄谷……先生？」

ーそして落とした。

知らない少女が、俺の名を呼んだから。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n1738q/>

大陽

2011年10月8日14時51分発行